

作 川口幸宏

知的障害を持つ子どもたちの教育を切り開いた人の自立への旅



第5回

セガンの幼少年期



先生様と奥方様の間に第一子が生まれました。第1回でも言いましたが、1812年1月20日です。どうやらいわゆるハネムーン・ベビィのようです。結婚して1ヶ月をハネムーン(蜜月)と呼んだことにちなんで言っただけです。

セガンは時の子にふさわしく、生まれてすぐに母親から離されて育ったのでしょね。なんせセガン家では地域の名士たちを集めて晩餐会を開いていたわけですから、奥方様が授乳に追われていては晩餐会の主催を無事果たすことなどできませんものね。上の図版は住み込み乳母。頭のキャップは公認職業としての乳母の印です。抱かれている赤ん坊は産着でグルグル巻にされ、動きを封じられています。かのルソーがもっとも嫌った「人間の自然」を奪う姿です。

でも、セガン自身による幼少年期の思い出の語りを見ますと、どうやら母乳育児を提唱した『エミール』の影響を受け

た両親の許で育ったと思われるのですね。ということは、先生様も奥方様も自分の育ちを自己否定なさり、貴族や上流階級のごく一部にはやり始めていた子育ての仕方を探り入れなさったというわけですね。ホントかなあ。とにかく、そのくぐりを次に紹介します。

1875年にアメリカで出版した『教育に関する報告』からの引用です。都合上、いくつかのパートに分けて紹介しますね。原文は英語なのですが、「母親たち」「父親たち」「私たち」という風に、登場人物が複数形になっているのがちょっと気になるのですが、それはひょっとしてフランスなまりの英語なのかもしれませんので、これ以上は追求しません。とにかく、「遊び」が「父親たち」のリードによって繰り広げられている描写となっています。

「楽しみにものを作るということは、ずっと昔から、家族で大きな位置を占めてきたはずである。ただ『エミール』がそれを流行にしたということだ。かの本の影響のもとで、母親たちは、いや特に父親たちは、もし私の幼少期の記憶が正しければ、日常の教育にエミール流のやり方を持ち込み、子どもたちが楽しみにものを作るにふさわしいようにと、熱心であった。」

伝承遊びと『エミール』との関連について述べられていて、たいそう興味惹かれますね。すでに哺乳期を過ぎた発達段階の子どもの育ちについての記述ですから、乳母に育てられたかどうかはここで問うことはできません。哺乳期を過ぎたら子育ては父母の役割だと言わんばかりです。

次、行きます。

「私たち、ブルゴーニュっ子たちは、パパの手の動作が壁



に、オオカミ、ノウサギあるいは椅子に座っている大工を表象する影絵を作ってくれた時、それを真似しようとしたものである。私たちは、パパに倣って、揺れる塔をドミノ牌で作ったり、我が兵士たちのテントをカードで張ったりしたものである。紙を簡単に折りたたんで、ひよこ、(コッコ)、家、ノアの箱舟、実在しないような小型船舶の艦隊を作った。また、はさみを使って紙から、財布、はしご、壁掛け、ひだ飾り、王冠を作った。やがて、アンズやサクランボの種を加工し、ハート型、かご状のもの、数珠に形作るようになった。ドングリヤマロニエで摩訶不思議な形のものを作ったものである。自然を知り尽くしているまさにその幼稚園の先生は、春には、私たちに、柳の木の幹から樹皮を剥がし、音を刻み、フルートのように奏でて、音を出す方法を示してくれた。あるいは夏には、帰り道に、高く緑に生い茂ったライ麦の茎を抜き取り、道端の頭上のサンザシを太さに応じて剥ぎ取り、まるで鳥のさえずりのようにさまざまな音曲を演奏してくれた。」

屋内外の伝承遊びの具体が綴られています。屋内の「影絵遊び」「カード遊び」「切り絵遊び」など、屋外の「自然にあるものを使っての遊び」など。そして、次の屋内遊びによって、セガンが回想している遊びが、じつは、トータルして、幼児前期、幼児後期、学童期を指していることが分かります。「家に帰ると、再び、私たちに手先の使い方を示してくれようとした。それには、子どもが理解できるように、たいていは仕掛けがしてあり、樽のたがをさらに強く締めるようにたがを弛めてあったり、できるだけ元のいい形に綴じなおすために教科書は表紙が引きはがされていたりというもので、手先の熟練の発達のために欠くことのできないものであつ



た。」

子ども集団の中で育つというイメージはなく、大人に導かれた幼少年期というイメージをぼくは持ちます。まるで、保育園や幼稚園、学校という「箱庭」みたいに。じつを言いますと、セガンの幼少年期には保育園はまったく未整備で拘束性が極端に強い状態だったし、幼稚園はまだ出現していません。小学校もまったく未整備状態で非義務。今日のようなイメージでセガンの回想を理解すると、間違いなく、歴史に対して大やけどをすることになります。一般的には教会関係者が開く今で言う個人塾のようなところに、実用に最低限必要な読書算と宗教的な立場からの道徳が行われるのが関の山でした。セガン家のような階層は住み込みの家庭教師かコレ



ージュ内に設置された初等科で学んでいたのです。上の図版は庶民が通った小学校。体罰あり教師の学力・教養無さに苦言を呈した戯画で、教師を「ペテン師だ」と揶揄しているのです。学校に入ったら入ったで人間性を否定され、出たら出たで学校でつけた「学力」程度では世の中を渡れるはずもなく、まさに、「入るも地獄出るも地獄」。これがセガンが生きた時代の学校の実像なんです。こんなところへ、地域社会の超エリートとして生きている先生様とその奥方様がご子息のためにと、通わせると考えますか？

話を戻しましょう。これまでセガンを語る人は皆さん、「両親の自然主義の考えと方法とに導かれてセガンは幸せな幼少年期を過ごした。」と言ってこられました。でも、他に同年代の、同地域の子どもが登場しない育ちって、幸せなことなのでしょうか。セガンが父母の許で「幸せな幼少年期を送

った」とするのならば、クラムシーの暮らしの中からその証拠を見つけなければいけないはず。遊び相手なら、たとえばパリから送られてきた里子など、先生様が密接に関わっていた子どもたちがたくさんいたはずですし、城郭に囲まれた外の地域ですと、農村部・原野部に限らず、ヨヌ川縁の筏制作現場であったりすることの方が「自然」のはずです。右の写真は薪材で作る筏制作現場で働く少年。こんな子どもたちも労働し、合間には遊び回っていたわけです。



まるで、時代から隔離された、「自然」と言っただけはいるけれど本物の自然状態ではない、あえて作られた話のようにぼくは思ってしまうのです。これ、セガンの考える教育論を普及させる「小道具」なんじゃないかなあ。

下の図版はフランスの子どもたちの遊び、「隠れんぼ」。子どもの「自然」で、こう言うのだとぼくは強く信じています。大人に教えられてする「隠れんぼ」なんて、考えられません。子どもの自然な遊びは、太陽の光やそよぐ風、草木のざわめきを、子ども自身がつかみとってくるものであったはずですよ。



じゃあ、どんな育ちをしたかって？セガン自身が 1843 年や 1846 年に著した著作の中で、彼が育った時代の一般論として厳しく批判的な目で綴っているのが、そうなのではないかと、ぼくは思います。つまり両親の育ちの過程をなぞって成長してきたけれど、ある時からそれは違うのではないかと、

と思ひ始め、理論的にも整備して著書に綴った、というのだと思います。

1846 年に著した著書『知的障害の精神療法、衛生学ならびに教育』に書かれている一般的な子育ての筋道は「乳母の子守歌、祖母の昔ばなし、家庭教師の授業」だというのです。そしてその頁には、3 歳、7 歳、14 歳と年齢を区切った発達段階が書かれています。3 歳までが乳母、7 歳までが祖母、14 歳までが家庭教師。一般的な子育て過程、といっても特権階級のそれを装いながら、セガン自身の経験が綴られているのは「祖母」という言葉で明らかですよ、普通なら里親とすべきところ。

念のために父方の祖父母、母方の祖父母の亡くなった年を調べてみたのですが、父方の祖父は 1799 年、祖母は 1800 年、母方の祖父は 1806 年、祖母は 1827 年に亡くなっています。そしてセガンは「祖母の家に自室を持っていた」と回想していますから、間違いなく彼は、オセールの祖母を里親として育てているのです。3 歳過ぎてから 7 歳ほどまででしょうか。一般的にはこの発達段階は社会に出る準備期になりますので、躰が厳しく為されます。体罰も平然と行われます。この当時、庶民の子どもは職人への弟子入りの準備段階にあたりますので、心身徳性がとりわけ厳しく教育されたのです。さて、セガンはどうだったのでしょうか。

彼は祖母の家の自室を父親に取り上げられたと綴っていますが、祖母が亡くなったのはセガンが 15 歳の年。おおよそ 12 年ほどの祖母家族との共同生活の中で、「自室を父親によって取り上げられた」のはいつ頃のことなのか、そしてなぜ取り上げられたのか、そこところはまったく不明なのですが、父系と母系の生活文化観の違いが現れているように思われて、仕方がありません。フランス社会には子どもに自室を与えるのではなく、乳母や里親と寝起きを共にする、のが常態でした。母系のサヴォア文化はどうなのでしょうかね。